

## 小学校国語科教材分析と授業実践事例 ——『もうすぐ雨に』・『おにたのぼうし』・『走れ』の場合——

白瀬 浩司    村崎 乃依    上原 嵯理

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2017年11月1日受付、2017年12月12日受理)

### 序

授業者(教員)による教材分析は、その物語に対する学習者(児童)の想いや意見を拾い上げていけるような、教室(学級)の状況に即した学習指導案として編み上げられねばならない。その編み上げは、教室全体が醸し出す雰囲気、さらに学級成員の心的な成熟度や既学習の到達度などを踏まえ、児童一人ひとりの顔や挙動を想起しつつ、授業場面における個々の肉声に、適宜、応じられるようなものをかたちづくる作業である。

本稿では、『もうすぐ雨に』(朽木祥・文、高橋和枝・絵)、『おにたのぼうし』(あまきみこ・文、いわさきちひろ・絵)、『走れ』(村中李衣・文、渡辺有一・絵)を教材分析の対象として取り上げ、同時に、授業実践の事例を示すことにする。ちなみに、三作品いずれも小学校中学年の国語科教材として、それぞれ現行の教科書(平成27年度版)に記載されたものだ<sup>1)</sup>。そして、異質な他者(時に異類)との一方向的な関わりを捉え返す契機を得て、自己の変容とともに他者との双方向的な関わりに気づいていく主人公の姿を描いた物語である。

新学習指導要領(平成29年3月公示)における小学校中学年の〈読むこと〉の領域をみると、(1)イ〈登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること〉、エ〈登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像すること〉、オ〈文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと〉などとともに、カ〈文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと〉という指導事項がある。まさにこの学年の児童は、個々の〈感想や考え〉の差異あるいは多様性に気づくべき成長過程(発達段階)に位置づけられていると言えよう。

さて、本稿の構成は次のようになっている。各章第1節で三つの物語の作品構造や主題について分析を行い、各章第2節でそれぞれの学習指導案と授業実践事例を示していく。ただし、今回の学習指導案は、大学生を児童役とする模擬授業に向けてまとめられたものであり、さらに全体の指導計画も全五～六時間に凝縮した設定ゆえ一時間(45分)あたり通常の小学校授業の一・五倍～二倍の内容を盛り込んでいる。したがって、小学校の国語科教室の一時間枠にそのまま流用しえぬ点もあるだろうが、授業展開のアイデアや工夫は十分に持ち込み可能だと考えている。また、本時案にあたる部分だけを略案に近い書式で記載してあることも予め申し添えておく。

なお、序章および第Ⅰ章（Ⅰ-1・Ⅰ-2）、第Ⅱ章の第Ⅰ節（Ⅱ-1）を白瀬、第Ⅱ章の第Ⅱ節（Ⅱ-2）を村崎、第Ⅲ章（Ⅲ-1・Ⅲ-2）を上原が分担執筆した。ゆえに、各節の文責はそれぞれの執筆者に帰するものである。

### Ⅰ-1. 『もうすぐ雨に』教材分析

序盤で提示される〈どこかでチリンとすずみたいな音がした〉という語りを反復しながら、物語は展開することとなる。

登校しようとしていた主人公〈ぼく〉は、網戸と窓ガラスの隙間に〈小さな小さなかえる〉を発見する。そこから出たがっているように見えたので、窓を半開きにしてやると、蛙は〈ぼく〉をじっと見つめるばかり。「ありがとうって言いたいのかな——。動物の言葉が、分かればいいのになあ」。そう告げた時、はじめて〈チリン〉という音が響いた。

その音色とともに、〈ぼく〉には生き物たちの人語で話す声が聞こえ、飼猫のトラノスケや、鳥、燕と会話を交わす。主人公の「いいなあ、朝から遊びに行けて」という発話に「ふん。遊びに行くんじゃないよ、だ」、「ねこには、ねこのご用が、たんとあるのさ」、「もうすぐ雨になるんだから。大急ぎで出かけないと」とトラノスケが応じ、「ちらかしたら、だめだよ」という呟きに「わたくしにもわたくしのじじょうがあるんですの。かわいい七つの子が、巣で口を開けてまっているんですからね」、「もうすぐ雨になるんですから。早く食べ物を持って帰りません」と鳥が応じる。燕の夫婦もまた「いそがしくて、お話ししているひまなんか、ありませんよ。もうすぐ雨になりますからね」、「そうそう。いそがしい、いそがしい。虫とり、虫とり」と告げたのである。

この三者のみならず、教室の水槽の緑亀や校庭の飼育小屋の兎や鶏までもが「もうすぐ雨に」と降雨を予告するのだが、空は晴れている。教室で「もうすぐ雨に——」と主人公が独りごちるや、級友たちが怪訝<sup>けげん</sup>そうに集まってきて、皆で窓の外へ目をやると〈大きな黒い雲がむくむく〉湧き上がるのが見えた。

昼までの授業日だったので帰途に着くと、〈ぼつぼつ〉と落ちてきた雨は激しさを増す。その雨音と合奏するごとく〈チリンチリン、チリンチリン〉とひっきりなしに音は鳴り、遠くから楽しそうな歌声が聞こえてきたものの、程なくそれらはどしゃ降りの雨音にかき消されるのであった。米屋の軒下で雨宿りする〈ぼく〉に、巣から見下ろす燕も、足元に走り込んできたトラノスケも人語で話しかけてこない。雨がやんで帰宅すると、毛繕いするトラノスケが〈ぼく〉の目をじっと見た。〈チリン〉という音色は響かず、彼が再び人語を話すことはなかったが、〈ぼく〉にはトラノスケの言いたいことがよく分かるような気がした。

反復される不思議な音に続いて聞こえた「もうすぐ雨に」という生き物たちの発話に対する〈ぼく〉の反応をおさえながら、その変容を捉えることが授業の一つの軸となるだろう<sup>2)</sup>。

この不思議体験を通じて、主人公は自己中心的で（あくまでも自分を基準とする）一方的

な他者理解から、それぞれが〈ご用〉や〈じじょう〉、対象（雨）に対する好悪を抱えているという相手の立場を慮る<sup>おもんばか</sup>双方向的な他者理解へと至るわけである。既に序章で触れたごとく、本教材は学習者たちの発達段階に照応し、期待される成長の姿を描いたものであり、彼らに気づきを促す契機ともなるはずである。

ところで、本作品を一読後、私は『聴き耳頭巾』の話<sup>3)</sup>を想起してしまったのだが、ここでは助けた生き物の恩返しとしての不思議体験が主人公に何らかの幸いをもたらす。〈ぼく〉自身、助けた〈小さなかえるのおれい〉と見なす描写があるから、だとすれば、他者理解について変容を遂げることが、〈ぼく〉にもたらされた幸いであつたとも言えそうだ。

私は、次のような描写が気になっている。猫は自由だという思い込みによるトラノスケに対する羨むような発話「いいなあ、朝から遊びに行けて」、烏がゴミを狙っていると一方的に思い込んでの呟き「ちらかしたら、だめだよ」。そして、不思議な現象に戸惑っているせいもあろうが、〈ぼくは、もうなるべくだれとも目を合わせないようにして、学校までかけていった〉という描写。この〈だれとも〉とは《どの生き物とも》の謂だろうが、それにしても、自身の《想定しうる他者》ならぬ《異質な他者》に対する主人公の身の処し方を端的に示しているように思われる。このほか、緑亀の水槽のそばに佇む彼の様子〈まわりを見回したけど、みどりがめの声は、ぼくのほかにほだれにも聞こえていないみたいだった〉や、飼育小屋に行った際にも彼の間近な周囲に他の児童たちのいる描写はない。

「もうすぐ雨に——」と、ふと発した〈ぼく〉の言葉に対し、〈みんなが、ぼくのことを見た〉という周囲の反応がようやく描かれ、こんな場面が続く。

「なんで、分かるのさ」／「晴れてるじゃないの」／ぼくは、こまった。ねこに聞いたとは言えないでしょ。みどりがめやうさぎから、ともね。／だけど、みんなでまどからのぞいてみたら、大きな黒い雲がむくむくわいていた。／「ほんとだあ」

ここには、異質な〈ぼく〉の発言を疑い、やがて信じていく（受け入れていく）級友たちの姿が描かれている。それは、〈ぼく〉が先立って体験した心情的軌跡と軌を一にしており、彼が《異質な他者》を受容しえたことで、自身もまた皆に受容されていくさまを示すように思われる。「いいなあ、朝から遊びに行けて」と猫を羨む発話は、彼にとって学校生活が必ずしも楽しいものでなかったことを窺わせるし、今回の自他の《異質性》の発見こそ、彼が学校に居場所を見出す第一歩、まさに幸いだったのである。

## 1-2. 『もうすぐ雨に』授業実践事例

この作品は、主人公が小さな蛙を助けた後に聞こえるようになった〈チリン〉という鈴のごとき音を媒介として、変化・成長していく様子が描かれた物語である。授業展開については、学習指導案（資料1）に示した。

さて、その音色の後に聞いた生き物たちの発話に対する〈ぼく〉の反応は、それぞれ次のように描かれている。

小学校国語科教材分析と授業実践事例

【資料1】『もうすぐ雨に』学習指導案(作成=白瀬浩司)

4. 本時の学習活動(第6時間目)

- (1) 目標 ①ぼくの行動や気持ちを読み取り、変化を推えることができる。 ②ぼくの身の上にも不思議な出来事が起こった理由について考えることができる。

(2) 展開

Table with 4 columns: 過程 (導入, 展開, まとめ), 学習活動, 相槌上の留意点, 時間. Includes detailed lesson steps and timing.

- (3) 評価 ①ぼくの行動や気持ちを読み取り、変化を推えることができる。 ②ぼくの身の上にも不思議な出来事が起こった理由について考えることができる。

第3学年1組 国語科学習指導案(略案・本時案)

平成29年6月20日 第1時限 3年1組教室 (佐藤児童教 男子14名、女子12名、計26名)

1. 単元名・教材名

読んで、かんじたいことを発表しよう。『もうすぐ雨に』(朽木洋・作、高橋和枝・絵)

2. 教材観および授業構想

本教材は、不思議な現象を体験し、変化・成長する男児の姿を描く物語だ。粗筋は改の通りである。登場しようとしていた(ぼく)は、自家の網戸と窓ガラスの隙間に小さな蛙を見つけた。助けやうと網戸を開いたものの、蛙は(ぼく)をたたくつめめるばかり。「ありがとうって言いたいのかな――」動物の言葉が、分ればいいのになあ」と叫びたとき、鈴のようなチリンという音がどこかで響いた。その音色とともに、(ぼく)には生き物たちの人語で話す声が聞こえ、教室中に飼育のトラノスケ、鳥、燕と会話を交わす。さらに、教室の水桶の緑地、校庭の飼育小屋の虫や蜘蛛の音が理解できた。彼らはみな一様に「もうすぐ雨に」と告げていた。下校時、本当に雨が降り始める。鈴の音色は絶えぬ間なく鳴り、雨を思ふような歌声が聞こえてきたが、雨足が強まるにつれ、かき消されていく。米屋の軒先で雨やみを待ち、駆け込んだきたトラノスケを抱いて帰花すると、あの音も鳴らず、トラノスケも人語を話さなかったが、(ぼく)にはトラノスケが何を言っていたのかわかるような気がした。

本教材には、生き物たちの言葉を理解できるという不思議な現象を、当初、信じられなかった(ぼく)が、徐々に受け入れていく過程が描かれている。それは同時に、自分の胸から見える範囲での一方的な他者理解の段階から、他者が抱えるそれぞれの事情や思いのあることに気づく段階に至る変容の姿でもあった。児童たちは、おそらく同年代の主人公に自身を投影しつつ、物語世界を読み進めていくはずである。反復される鈴の音色に続いて聞こえた「もうすぐ雨に」という生き物たちの発話に導かれる(ぼく)の反応をおさえたながら、学習指導要領(小学校中学年)の(読むこと)領域の指導事項にいう(文章を認んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと)、さらにそれを(共有し、一人一人の感じ方などに違いがあること)への気づきを促せるよう、授業を展開していく。日常的な友人関係の中で自他の距離を感じ始める成長段階にある児童たちだからこそ、自己を取り巻く他者との関係性を振り返り、捉え直す契機となることを期待している。

3. 指導計画(全6時間)

- 第1時間目=全文通読、新出漢字・読み替えた漢字の確認、難解語句の確認、初め感想
第2時間目=第一場面(P76.L1~P78.L1)・第二場面(P79.L3~P79.L6)の読解
第3時間目=第二場面(P76.L8~P78.L12)・第四場面(P79.L1~P79.L5)の読解
第4時間目=第五場面(P74.L7~P75.L3)・第六場面(P75.L5~P76.L7)の読解
第5時間目=第三場面(P76.L9~P77.L11)・第八場面(P78.L1~P78.L9)の読解
第6時間目=第九場面(P78.L11~P79.L10)の読解、読解のまとめ、最終感想

.....【本時】

トラノスケの発話への反応＝〈いや、言うはずないよね。空耳かなあ〉〈まさか〉

鳥の発話への反応＝〈ぼくも、あんぐり口を開けた〉

燕の発話への反応＝〈いったい、どうなってるんだろう〉

こうした主人公の反応については、不思議な音・生き物たちの発話とともに、学習者に挙げさせつつ板書していくことになる。やがて〈チリン〉という音が、動物の喋る合図ではないかと仮説を立てた彼は、緑亀で実験して〈やっぱり〉と不思議な現象について確信し、さらに飼育小屋の兎や鶏で追試をおこなう。当初、不思議な現象を信じられずにいた彼が、徐々にそれを受け入れ、信じるようになるさまを捉えさせたい。

また、一連の不思議な現象に接して、〈ぼく〉の生き物たちに対する《猫も、鳥も、燕も自由で、遊んでいられる》とか《雨が降る日はつまらない》といった決めつけ・思い込みが覆されていくこと——どの生き物にもそれぞれの〈ご用〉や〈じじょう〉があり、〈雨がふるのがうれしかったり、ゆかいだったりするだれかが、どこかにいる〉こと——を、順次性に従いながら確認していく必要があるだろう。

かくて、〈ぼく〉の変化についてまとめた後、不思議なことが彼の間近で起こった理由について、変化前と変化後の〈ぼく〉の姿を踏まえながら、グループで話し合わせる。児童たちが、変化後の主人公の周囲に級友たちが集まってきたこと、あるいはその場面に至るまでの他者（人間）との関わりの描写が稀薄なこと気づけば上出来なのだが、机間指導をしながら児童たちの発言を拾い、気づきを促していく。各グループからの発表を経て、授業者のほうで次のようにまとめた。

「みんなで読み取ってきたように、自分の見聞きする様子や、こうじゃないかという思い込みで相手を見ていた〈ぼく〉が、生き物たちと話す不思議な体験をして、相手にもそれぞれの用事や事情があることに気づきましたね。クラスの友達と話をするきっかけも、生き物たちが告げていた『もうすぐ雨に』という言葉でした」

「生き物たちが人の言葉を話すなんて……と、〈ぼく〉は初め疑い、だんだん信じるようになりました。〈ぼく〉の一言に対して、クラスの友達も初め疑い、空に広がる黒い雲の様子を見て信じてくれました。学校に行くのが楽しみではない、というわけでもなかった〈ぼく〉が友達と一緒にいる場面は、ひとつだけでした。〈ぼく〉が相手の事情を受け入れられるようになったからこそ、〈ぼく〉もまたみんなの中に受け入れてもらったのではないのでしょうか」

このまとめをおこなった後、本作品の結末部の描写、

せなかを一なめ、二なめしてから、トラノスケは頭を上げて、ぼくの目をじっと見た。  
／チリンという音は鳴らなかったし、トラノスケも口をきかなかった。でも、トラノスケがなんて言いたいのか、ぼくには、ようやく、分かったよ。

において、〈ぼく〉が想像したトラノスケの言葉を、短冊サイズの下稿用紙(50字程度)に各



自分で記入させ、発表させていく。正解のない問いゆえ、当然ながら、各自がさまざまな答えを出してくるだろうが、これもまた個々の差異として受容し合えるよう導きたいところである。

## II- 1. 『おにたのぼうし』教材分析

物語の冒頭部に配された〈ばら ばら ばら ばら〉という一行の豆まきの音は、結末部で二行にわたって繰り返される。いわば、本作品は節分の夜を背景として、豆まきで始まり、豆まきで幕を閉じていく。そして、両者はいずれも小さな黒鬼の子どもである〈おにた〉を、家から追い払う<sup>イベント</sup>行事となった。前者の豆まきは少年(まこと君)によるもので、後者は無名の少女によるものである。

少年の家の物置小屋に去年の春から棲みついていた〈おにた〉は〈気のいい〉鬼で、少年の遺失物を見つけたり、にわか雨の際に洗濯物を取り込んだり、少年の父親の靴を磨き上げたりした。そんな〈こっそり〉なされた善行を少年が知る<sup>よし</sup>由もなく、彼のまく豆の音に追いつたてられ<sup>つ</sup>角隠しの麦藁帽子をかぶった〈おにた〉は粉雪の舞う屋外へ出て行く。この時、〈おにた〉が抱いた想いは、「人間っておかしいな。おには悪いって、決めているんだから。おににも、いろいろあるのにな」というものだった。

今宵、どの家にも鬼除けの柗の葉が飾られており、<sup>あ</sup>当て所なく歩いてきた〈おにた〉は、やがて豆の匂いも柗の飾りもない一軒のトタン屋根の家を見つける。ドアから〈そりり〉と家に忍び込んだ彼が目あたりにしたのは、部屋の真ん中に敷かれた薄い布団に横たわる母親と、雪で冷やしたタオルをその額に載せて看病する少女の姿。熱に浮かされた母親の「おなかがすいたでしょう？」という問いかけに応じ、少女は健気にこんな嘘をつく。「あたし、さっき、食べたの。(中略)知らない男の子が、持ってきてくれたの。あったかい赤ごはんと、うぐいす豆よ。今日は節分でしょう。だから、ごちそうがあまったって」。

だが、安堵してまどろむ母親の横で長い溜息をつく少女の横顔から〈おにた〉が察した通り、この家の台所には米粒一つ、大根一切れすらなかったのである。夢中で外へ飛び出した彼は、しばらくの後、少女の家のドアを叩き、布巾をかけたお盆を差し出した。「節分だから、ごちそうがあまったんだ」——そう告げた彼が持参したのは〈温かそうな赤ごはんと、うぐいす色の<sup>に</sup>豆〉。まさに、少女の健気な嘘を現実化するもの、あるいは、心優しき少女を嘘つきにしないための〈おにた〉の優しさでもあったろう。

食事をとりながら、ふっと考え込んでいた様子の少女は、やがて彼の問いかけに応ずるかたちで「あたしも、豆まき、したいなあ。(中略)だって、おにが来れば、きっと、お母さんの病気が悪くなるわ」と告げる。悲しそうに身震いし、突然、氷が溶けるように姿を消す〈おにた〉。「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……」——先に彼が抱いた<sup>い</sup>想いは、この時、肉声として吐露<sup>とろ</sup>された。後に残ったのは、麦藁帽子と、その下の黒い豆。次なる願いの叶った少女は、その黒豆で静かな豆まきをしたのである。

反復される描写に着目するならば、先述した豆まきの擬音語と、鬼にも「いろいろある」という〈おにた〉の言葉であろうが、これらは《少年の家／少女の家》という空間と不可分に結びついたものとしてある。したがって、この授業で読解の一つの軸となるのは、《少年の家》および《少女の家》における《①豆まきと②〈おにた〉の人物形象（言葉や行動）》を対比的に捉えていくことである<sup>4)</sup>。

第①項については、前者が〈元気に豆まきを始めました〉〈豆を、力いっぱい投げました〉、後者が〈そっと、豆をまきました〉〈とてもしずかな豆まきでした〉と描出されていることから、順に《動的なもの》と《静的なもの》の対比として捉えられる。

一方、第②項について、まず、鬼にも「いろいろある」という〈おにた〉の言葉であるが、前者では心の中に抱いた内言として、後者では肉声を伴った外言として表出されているから、順に《静的なもの》と《動的なもの》の対比として捉えられよう。

次に、同じく第②項の行動についておさえておくならば、前者には〈こっそり〉〈はずかしがり屋〉〈見えないように、とても用心していた〉〈カサツとも音をたてないで〉、後者には当初〈すばやく、家の横にかくれました〉〈そりりと〉〈ねずみのようにかくれました〉〈こっそり〉といった前者から継続する描写を含みながら、少女との対面（いわば、相手の前に姿を現すこと）を決意して以降、〈なぜか、せなかがむずむずするようで、じっとしていらなくなりました〉〈もうむちゅうで（中略）とび出していきました〉〈入り口をトントンとたたく〉〈一生けんめい（中略）言いました〉〈心配になってきく〉〈とび上がりました〉〈手をだらんと下げて、ふるふるっと、悲しそうに身ぶるいして言いました〉という描写が重ねられていくわけだから、これまた順に《静的なもの》と《動的なもの》の対比になっていることを確認するはずである。

ただし、行動について付言しておくならば、全篇を通じて一貫して変わらぬ点もある。それは〈おにた〉の、鬼にも「いろいろある」（つまり、良い鬼だっている）という信条に関わるところでもあるが、他者のために《善行》をなし続けるということだ。

この物語の結末が持つ、ある種の残酷さや落胆の空気は、もちろん、変えようがない。だから、〈おにた〉が残した麦藁帽子に人間との関わりへの絶望や諦めを看取する向きも、当然ながら、あるだろう。しかしながら、少年（まこと君）との関わり方から少女との関わり方へ、すなわち、姿を見せぬ存在であることから相手と対面する存在になることへ向け、〈おにた〉はまだ第一歩を踏み出したばかりなのである。少女の二つ目の願いさえも叶えたところに、〈おにた〉の前進する意志を汲み取っておきたいと私は思うのである。

## II- 2. 『おにたのぼうし』授業実践事例

この作品の授業では、二つの豆まきの比較、〈おにた〉の心と行動の変化、さらに〈おにた〉と少女の共通点を捉え、なぜ彼は最後まで少女の願いを叶えたのか、また豆まきを通じて受

【資料2】『おにたのぼうし』学習指導案 (作成=庄山優香・花田直穂・藤木晴香・村崎乃依)

第3時間目…第三場面 (P107.L1~P109.L8) の読解。  
 第4時間目…第四場面 (P109.L10~P112.L6) の読解。  
 第5時間目…第五場面 (P112.L8~P115.L9) の読解。  
 第6時間目…読解のまとめ。最終感想。

……【本時】

4. 本時の学習活動 (第6時間目)

(1) 目標

①まことと豆まきの豆まきの違いを理解する。  
 ②おにたの行動の変化を捉え、おにたの気持ちを描きながら読む。  
 ③おにたが最後まで女の子の願いを叶えた理由を考える。

(2) 展開

| 過程                      | 学習活動  | 指導上の留意点 (評価事項)  | 時間  |
|-------------------------|---|---|-----|
| 導入                      | 1. 前時の復習をする。                                | ○前時の学習内容をふり返らせる。<br>・題名、作者、登場人物、場面の様子など                 | 3分  |
| 展開                      | めあて   | ○おにたが女の子の願いを叶えようとする理由を調べる。                              | 7分  |
|                         | 1. あてをワークシートに写し、音読する。                       | ○めあてを仮書し、指差しつつ音読させる。                                    | 10分 |
|                         | 2. 第五場面を調べる。                                | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 3. 第五場面から二人 (まこと君、女の子) の豆まきの様子がわかる箇所に傍線を引く。 | ○おにたの行動が、(こっそり) から《はつまり》したものに、また気持ちを表している(思った) に変化している。 |     |
|                         | 4. 教科書から二人 (まこと君、女の子) の豆まきの様子がわかる箇所に傍線を引く。  | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 5. 傍線を引いた箇所を音読する。                           | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 6. 二人の豆まきの様子を比較して発表する。                      | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 7. まこと君の豆まきと、女の子の豆まきを比較して発表する。              | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 8. おにたの行動の変化を捉え、発表する。                       | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 9. おにたが最後まで女の子の願いを叶えた理由について考える。             | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 10. 考えたことを発表する。                             | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | 11. 誰かを思いやる心と優しさについて、教師の説明を聞く。              | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                                  |     |
|                         | まとめ   | ○おにたは、やさしいおにたでいたから。<br>それは、女の子の願いを叶えたから。                |     |
| 12. まことのワークシートに答えを記入する。 | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                      | 2分  |     |
| 13. 次時の学習内容をあらいまわす。     | ○おにたの行動が、必要に応じて補足説明する。                      |   |     |

(3) 評価

①まことと豆まきの豆まきの違いを理解することができたか。  
 ②おにたの行動の変化を捉え、おにたの気持ちを描きながら読むことができたか。  
 ③おにたが最後まで女の子の願いを叶えた理由を考えることができたか。

3. 指導計画 (全6時間)

第1時間目…全文通読、新出漢字・読み替え漢字の確認、難読語の確認、初読感想。  
 第2時間目…第一、第二場面 (P102.L1~P105.L13~P106.L10) の読解。

第3学年2組 国語科学習指導案 (略案・本時案)

平成29年6月6日 第1時限 3年2組教室  
 (在籍児童数 男子12名、女子13名、計25名)

授業者 庄山優香、花田直穂、藤木晴香、村崎乃依

1. 単元名・教材名  
 物語を読んで、手紙を書こう・『おにたのぼうし』(あまんきみこ・文、いわさきひろ・絵)

2. 教材種および学習構想

本教材は、黒鬼の子と人間の出会いを描いた物語である。最初は次のようになっている。ある家の物語小屋の天井に、小さな黒鬼の子・おにたが住んでいた。彼はともがましい鬼で、その家の主人のために遺棄物を見つたり、雨を時に荒瀧物を取り込んだりした。しかし、誰も彼を行わぬとは気がない。部分の日、その家でも豆まきが行われ、おにたは物語小屋にいらなくなった。「人間っておかない、鬼にも色々あるにや」——そう思いながら家の家を探しに出る。角隠しの表裏帽子を振り、雪の中を歩いていると、豆の匂いも臭いもない家を見つける。そこには、少女と背負いの母親が住んでいた。母親に心配をかけたまことと、傘をさして歩いているにも関わらず、食事をしたと囁く少女。その姿を見て、おにたは懸命に食欲を調べる。それとなく彼は表裏帽子を脱ぎ、彼女の目の前から姿を消す。帽子の下には、黒い豆が置かれていた。少女は母親の回復を願い、静かに豆まきをするのだった。

本教材では、二つの豆まきと (豆まきをすす相手に対する) おにたの行動が重要な意味を持つ。物語は豆まきで始まり、豆まきで終わる。両者を比較すると、冒頭で一家の少年が行うのは毎年の慣例行事としてある。 (ばらばら) という同じ指すも切なる思い——母親の病気が癒えるまでと、後者には (帽子を振り) おにたは少年と少女双方に対して善行を為すが、前者には姿を見せずこっそり、後者には (帽子を振り) 鬼の象徴である角隠しを脱ぎ、はつきり姿を現した。シンプルな対比構造に見えるが、そこには並行して『おにたの願い』と『少女の願い』の対比も内包されており、おにたの行動や心の動きは、物語の展開にしかかかって活発化し、培っていき。

私は、本教材の主題を次のように捉えている。おにたと少女の願いは切実なものだが、それは時に叫ぶぬこと、もある。少女の願いと母親に比べて優しく (おにたにとっては無意味に見える状況で) 彼の優しさが後押ししたように、大切な誰かに向けて優しく——それは時に叫ぶことも、時に裏切られても、変わらず抱き続ける願いなのだ。この物語の悲しい結末は驚愕ではない。それでも、児童たちには、誰かに優しくあり続けることの強さにも気づいてほしいと考えている。

本授業は、おにたの行動の変化の取り方を中心に進めていくことになる。児童たちには、二つの豆まきを対比しながら、さらに女の子の心情を捉え取らせるとともに、『おにたで、いるいるあるのち』という言葉の背後にあるおにたの願いも捉えさせたい。誰かを思いやる優しさの理解を深め、児童たちの日常に活かせるような指導を心がけるようにする。

3. 指導計画 (全6時間)

第1時間目…全文通読、新出漢字・読み替え漢字の確認、難読語の確認、初読感想。  
 第2時間目…第一、第二場面 (P102.L1~P105.L13~P106.L10) の読解。



け継がれた思いやりや優しさについて考えることを狙いとする。なお、授業の流れについては、学習指導案（資料2）で確認していただきたい。

先述の狙いに沿いながら、①〈まこと君〉と少女の豆まきについて、②二人の家にいたときの〈おにた〉の心・行動の変化について、③〈おにた〉が少女の願いを叶えた理由について、という三点を読解活動の軸にし、授業を行う。

まず、①の活動に入る前に教科書を確認し、本教材が《豆まき》で始まり《豆まき》で終わっていることに着目させる。教科書本文の〈まこと君〉と少女の豆まきの特徴がわかる箇所に傍線を引き、二人の豆まきの違いをおさえる。前者の豆まきはごく一般的な毎年定例行事に過ぎず、後者は母親の病気が治るようという願いが込められたものだ。他にも煎りたての豆と黒く温かい豆、〈ばら ばら〉の回数などにも着目する。さらに、それぞれの豆まき（元気のいい豆まき・静かな豆まき）の様子を児童たちに動作化させることで、違いを明確にすることができた。本文同様に「福はあ内、鬼はあ外」という掛け声に合わせ、豆をまくよう指示を出す。その際、〈まこと君〉と少女の豆まきは、声の大きさや動作をどのようにすれば良いかを全体で確認してから実践した。また、二人の豆まきのそれぞれの特徴を表として上下に板書し、比較しやすくするようにした。

次に、②の活動については、〈まこと君〉の家と少女の家で積んだ善行を書き出し、〈おにた〉の行動を比較する。前者の場合は、誰にも気づかれぬようにこっそり善行を重ね、誰も彼がしたことだとは知らないままだが、後者の場合は少女の目の前に現れて善行を積む。彼の行動が《こっそり》したものから《はっきり》したものへと移り変わっていることをおさえる。さらに、行動だけでなく、心の動きや人間に対する思いの変化を教科書本文で確認する。〈まこと君〉の家で豆まきが行われた際、〈おにた〉は「人間っておかしいな。おには悪いって、決めているんだから。おにも、いろいろあるのにな」と《思っ》ているが、少女が豆まきをしたいと打ち明けた際は、「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……」と〈悲しそうに身ぶるい〉しながら《言っ》ているのだ。この二点をおさえ、〈おにた〉の行動と心の動きに《変化》があったことをつかんでいった。

以上の二点を踏まえ、いよいよ最後に③の活動に入る。児童の自由な考えや意見を聞きたいので、教員からはあまり助言をせず、様子を見るようにした。しかし、手が止まっている児童や、なかなか自分の考えが書けない児童が多く見られたため、豆まきをする様子や、母親についた嘘（空腹であるのに食事を済ませたと告げる）、また母親を看病する様子を振り返り、少女はどんな人物であるかを再確認した上で、再度取り組むよう促した。

この物語は、少女にも《鬼》という存在を誤解されたまま悲しい結末を迎える。人間と同じように彼らにも様々な鬼がおり、なかには心優しい鬼もいるということを認めてもらうことはできなかった。しかし、これまでの①・②・③の活動を振り返り、〈おにた〉の少女に対する《優しさ》は彼女に届いていることを、教員の意見として伝える。《鬼》と《人間》、

立場は違うけれど、自分と境遇が似た少女のことを放っておけなかった。〈おにた〉は少女のために温かい料理を準備し、さらに豆まきをしたいという願いすらも叶えてしまう。

ここで、少女が豆まきをしたいと言ったのは、毎年の恒例行事としてではない。母親の病気が治るよという切なる願いが込められたものであることを板書を用い、再確認する。彼が準備した豆を使って、少女は母親の治癒を願いながら豆をまく。少女を思いやる〈おにた〉の優しい気持ちや配慮が、彼女の母親を思いやる気持ちを後押ししている。〈おにた〉と少女、両者の優しさの対象はそれぞれ異なるが、誰かのことを思う温かい気持ちは同じである。そして、彼はただ少女が可哀想だとか、不憫だと感じたから助けたのではないことをおさえるようにしたい。こうして、誰かを思う温かい気持ちや、その優しさが誰かの背中を後押ししていることを伝え、児童たちの今後の生活に繋げていけるようにまとめた。

### III- 1. 『走れ』教材分析

物語の冒頭部にある〈足のおそいのぶよには、ゆううつな日だ〉という理由が、読み進めるにつれ、徐々に明確になるように描かれている。

運動会当日の朝、〈のぶよ〉が布団をたたんでいると、弟の〈けんじ〉が顔をのぞかせる。「ね、ね、今日はお母ちゃん、ぼくが走るまでに来てくれるよね」「ん……たぶんね」——こんなやりとりから、彼が自分のことしか考えていないのが垣間見える。それと対照的に、〈のぶよ〉は忙しい母親の代わりをしているように見える<sup>5)</sup>。

二人の母親は、父親が亡くなってから、駅前で弁当の仕出し屋を一人で経営している。特に遠足や運動会など行事のある日は大忙しで、早朝から仕事に出掛けていた。去年の運動会は、母親は見に来ることができず、店の手伝いのおばさんが昼の弁当を届けてくれた。

その時まで一年生だった〈けんじ〉は、一等を取ったものの母親が来ていないことを知り、大べそをかいた。そんな彼を当時三年生だった〈のぶよ〉は慰め、その後に始まる最下位確実の自分の短距離走のことで頭がいっぱいだった。ここでの、〈のぶよ〉の運動会に対する感情をしっかりと押さえておきたいところだ。今年こそ自分の短距離走を見てもらいたい〈けんじ〉は、胸を張って言い放った。「絶対に来るさ！　きのうの夜、ちゃんとやくそくしたもん！」

いよいよ運動会が始まり、プログラムは二年生の短距離走に進んだ。〈けんじ〉は、保護者席をちらりと見て、すぐにまっすぐ前をにらんだ。彼がゴールテープを切った後、母親が駆け付けたが、二年生の短距離走は終わっていた。

昼休みになり、特製の弁当を持った母親が〈けんじ〉に対して短距離走のことを褒めるが〈けんじ〉は下を向いて返事をしない。母親は、店の手伝いの人に後を頼んで、運動会へ出掛けようとしたが、三十個の弁当の注文が入ったことを伝えた。弁当の注文に対応し終えて駆け付けた母親に、〈けんじ〉は既製品のような弁当の文句を言い、駆け出していった。

「ぼく、今日は特製のお弁当作ってって、言ったのに」／「こんなんじゃないやだ。お店で売ってるのと同じじゃないか」／「もう行く」

これらの言葉は、短距離走を見てもらえなかった悲しみの現れだったかもしれない<sup>6)</sup>。母親の膝から落ちたメッセージ付きの割箸<sup>わりばし</sup>を見て、〈のぶよ〉は、母親の気持ちも分かった。両者の気持ちが分かった彼女は、〈けんじ〉を追いかけ、割箸をそっと見せた。それを見た〈けんじ〉は、何も言わず、帽子をぐつと被り直し、二年生の席へかけていった。

〈のぶよ〉も〈けんじ〉も、お昼を食べないまま、午後の競技が始まった。綱引きと六年生のフォークダンスが終わり、四年生の短距離走になる。一列スタートする度に、〈のぶよ〉の心臓の音はだんだんと高くなる。耳の奥で、かすかにピストルの音を聞いて、ひとつ遅れて〈のぶよ〉も走り出した。

(がんばって走らなきゃ)／(お母ちゃん、ショックだったろうな。でも、けんじもさみしくて……。わたしだって本当は……)／(あ、もう走れない)

〈のぶよ〉の気持ちと体が重くなる現象から、二つが因果関係で結ばれていることが分かり、これらのことが走ることへの意欲をさらに低減させる原因になった。そのとき、ふいに背中に、「姉ちゃん、行けっ!」「のぶよ、行け!」という二つの声が重なった。

二人の応援のおかげで、〈のぶよ〉は体に絡み付いていた様々な思いがほどけていき、走りきることができた。この時初めて〈のぶよ〉は背中を押す側から、押される側へと変化した。また、〈けんじ〉は応援を通して相手と向き合うことができ、成長することができた。係の人にラストと言われたが、今までとは違い、誇らしく感じていた。退場門で〈けんじ〉が「へたくそ!」と言い、母親はにかつと笑った。ここでの「へたくそ」の意味は、昼休みに気まぐずいまま別れたことに対する〈けんじ〉なりの「ごめんね」という意味も込められた照れ隠しのようなものだったのではないかと推察される。二人は駆け出しながら、お腹が減ったことを共有していた。これは、今まで〈けんじ〉の投げかけに対して曖昧な返事しか返していなかった〈のぶよ〉が、初めて投げかけに応じた瞬間でもあり、二人の気持ちが通じ合ったことが分かる。

### III- 2. 『走れ』授業実践事例

この作品は、運動会を通して、〈のぶよ〉と弟の〈けんじ〉が変化し、成長していく過程を描いた物語である。二人の変化や成長を捉える中で、自己や他者と向き合うことの大切さに気付けるような指導を行う。授業展開は学習指導案(資料3)に示したとおりである。

まず、第三場面から、〈けんじ〉と〈のぶよ〉の言動と気持ちの変化が分かる箇所に傍線を引く活動を行った。この作業に対し、当初、児童たちは戸惑っていたようだが、台詞や感情が表れている箇所に着目することを促すと、登場人物の気持ちに寄り添う姿が見られた。

この作業を終えた後、主人公である〈のぶよ〉の言動と気持ちの変化について、青・赤の色鉛筆で傍線を引かせながら捉えさせることにしたのである。

【資料3】『走れ』学習指導案 (作成=上原暎理・西野令奈・山本夕夏)

4. 本時の学習活動 (第4時間目)

(1) 目標

- ①第三場面における、のぶよとけんじの姿の変化を捉える。
- ②のぶよの運動会に対する気持ちの違いを理解する。
- ③二人のよく似た発話から、のぶよとけんじの気持ちが通じ合ったことを捉える。

(2) 展開

| 過程  | 学習活動  | 指導上の留意点 (評価事項)   | 時間  |
|-----|---|--|-----|
| 導入  | 1. 前時の復習をする。  | ○前時の学習内容をふり返り、新着が登場人物に与えた影響について確認する。   | 10分 |
| 展開  | <p><b>めあて</b></p> <p>『のぶよとけんじのすがすがしいが、どのように変化したのか考えよう』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2. めあてをワークシートに写し、音読する。</li> <li>3. 第二場面を読み終え、三人ずつ読ませる。</li> <li>4. のぶよとけんじの気持ちの変化がわかる箇所を発表する。</li> </ul> <p>5. 二人のよく似た発話を第三場面から見つける。</p> <p>6. 見つけた箇所を発表する。</p> | <p>○めあてをワークシートに写し、音読する。</p> <p>○指名読みにより、二人ずつ読ませる。</p> <p>○児童の発言を板書する。</p> <p>○筋節ではない発言に対しては、受けとめつつ、正答へ導く。</p> <p>○のぶよの気持ちの変化を、運動会に対する気持ちのの違いに関連づけて考えさせる。</p> <p>○前時指導を行い、当該箇所を見つけてくれる児童には、適宜、助言する。</p> <p>○児童の発言を板書する。</p> | 28分 |
| まとめ | <p>けんじは、相手と向き合うことで成長でき、のぶよは、せをおされるそんざいに変化した。</p> <p>7. まとめをワークシートに写し、音読する。</p> <p>8. 次時の学習内容を知らせる。</p>  | ○まとめを板書し、指差しつつ音読させる。 <p>○次時は、自分の運動会の思い出を作文に書くことを伝える。</p>   | 5分  |
| 総括  | 13. 本時の学習内容を振り返る。   |  | 2分  |

(3) 評価

- ①第三場面における、のぶよとけんじの姿の変化を捉えることができたか。
- ②のぶよの運動会に対する気持ちの違いを理解することができたか。
- ③二人のよく似た発話から、のぶよとけんじの気持ちが通じ合ったことを捉えることができたか。

第4学年1組 国語科学習指導案 (略案・本時案)

平成29年7月18日 第1時限 4年1組教室  
(在籍児童数 男子11名、女子12名、計23名)

授業者 上原暎理、西野令奈、山本夕夏

1. 単元名・教材名

人物の変化をとらえよう『走れ』(村中幸衣・文、渡辺有一・絵)

2. 教材種および授業構想

本教材は、のぶよとけんじの成長や気持ちの変化を描いた物語である。祖孫は次のようになっている。のぶよは短距離走に自信がなく、運動会に悪い出がない。一方、彼女の弟のけんじは運動会が楽しく、母親が見に来ることを待ち望んでいた。だが、彼の短距離走の時、母親は来られなかった。そのこと母は、急な弟の注文への対応で、けんじの走る姿を見ることができなかったのだ。そのこと母は、母親が仲参した店の非当をけんじは嫌がった。だが、のぶよは親睦の袋に母親がわがわがたため、メモがあったことに気づき、けんじにそっと手渡す。のぶよは、弟と母親の双方の気持ちがわかるため、メモをヤレた気持ちで短距離走に臨むが、二人の応援に背中を押され、今までは遠くゴールをかけて、けんじに焦点を当てて、のぶよが疎外感を感じていることがわかる。だが、第三場面では、のぶよに焦点を当てて、けんじに焦点を当てて、けんじに打ち勝つことがわかる。その背景には、いつも甘えてばかりだったけんじと忙しくてあまり聞かれない。去年ののぶよは運動会が憂鬱だったが、今年の運動会では苦手を短距離走と母親の支えを得たため、自分と向き合えて笑顔で終ることができた。一方、けんじは、去年には比べて相手の気持ちを理解できるようになった。この二つが、物語に仕掛けられた物語展開の構造となっている。児童自身や他者と向き合うのは、難しいことだが、向き合う過程が自分自身の成長に繋がるものである。児童たちは、場面ごと登場人物の気持ちの変化を捉えながら自分自身や他者と向き合うことの大切さを読み取ってほしい。たとえ自分が苦手なことであっても、諦めずに挑戦することや友達を支えることなど、日常の場面を想起させつつ、考えさせていきたい。

登場人物の心情を読み取ることを中心に据え、物語の中心となる人物が誰かを読み取り、場面ごとの登場人物の心情の変化を比較して物語の主題に気づくことができるようにする。

3. 指導計画 (全5時間)

- 第1時間目…全文通読、新出漢字・読み替え漢字の確認、難読語の確認、初速感想。
- 第2時間目…第一場面 (P56. L11~P57. L2) の読解。
- 第3時間目…第二場面 (P57. L3~P58. L3) の読解。
- 第4時間目…第三場面 (P58. L4~P58. L13) の読解。
- 第5時間目…読解のまとめ、最終感想。

……【本時】

「のぶよの気持ちが分かる所がたくさん出ましたが、この気持ちを赤と青の色鉛筆を使って色分けしてもらいます。青は悲しい気持ちや辛い気持ちに引き、赤は嬉しい気持ちに引きましょう」

次に、〈けんじ〉と〈のぶよ〉の気持ちが変化したきっかけを児童に気付かせるよう、割箸の存在と割箸がもたらした効果を挙げつつ、次の場面の読解へと繋げていく。すなわち、〈けんじ〉は母親からの割箸のメッセージがきっかけで、母や姉の気持ちに寄り添えるようになったこと、〈のぶよ〉は二人の応援があったから、最後まで走り抜くができたこと。でも、一生懸命走った〈のぶよ〉に対し、〈けんじ〉が投げかけたのは、罵倒<sup>ばとう</sup>のような言葉だった。

その言葉を児童に挙げさせ、ここで、〈けんじ〉がどういう気持ちで「へたくそ」と言ったかを考えさせることにした。自分ならどのような声掛けを行うのかと、児童自身の立場に置き換えてみるよう促し、ある程度の意見が出たところで、この言葉をきっかけに二人が仲直りできたこと、それは彼なりの「ごめんね」であったことを確認する。

「みんなも、相手になかなか自分の気持ちを伝えることができないことがあると思います。ですが、うまく伝えられないなりに考え、頑張っ<sup>て</sup>伝えようとする姿勢が大切だと先生は思います。だから、みんなも〈けんじ〉と〈のぶよ〉のように諦めずに相手の気持ちと向き合える人になって欲しいと願っています」

続いて、この仲直り以降の場面で、二人が発したよく似た台詞を見つけさせ、一斉に声に出して読むよう指示した。似た台詞を見つけることは簡単にできたものの、そのことで互いの気持ちが通じ合っている点を児童に捉えさせるのに少し苦労してしまった。

一連の読解活動の後、〈けんじ〉と〈のぶよ〉の変化を捉えながら、授業者によるまとめを次のおこなっていく。なお、次時には、児童一人ひとりの運動会の思い出を書く作業に取り組ませる予定である。

「今まで〈けんじ〉はわがままで支えられるだけの存在でしたが、お母ちゃんが持ってきた割箸のメッセージをきっかけに、相手のことを考えられるようになり、支える側に変化したことが分かりますよね。一方、〈のぶよ〉は今までお母ちゃんの代わりに〈けんじ〉を支える側でしたが、二人の応援をきっかけに背中を押される立場に立つことになったわけです」

今回の模擬授業では、登場人物の場面ごとの気持ちの変化を児童にどう伝えるかが難しかった。事前の打ち合わせで、〈けんじ〉の〈のぶよ〉に対する気持ちを捉えることに苦戦し、新たな疑問が浮上することも多々あったが、教材研究を重ねる中で徐々に焦点化できるようになった。それから、実際に模擬授業に取り組んでみて、導入の作業段階で、児童の疑問に寄り添う机間指導が、授業づくりにおいて重要であることを改めて実感できたと思っている。



## 注

- 1) 『もうすぐ雨に』は『新編 新しい国語』三下(東京書籍、2015年7月)に、『おにたのぼうし』は『新編 新しい国語』三上(東京書籍、2015年2月)および『小学生の国語』三年(三省堂、2015年2月)に、『走れ』は『新編 新しい国語』四下(東京書籍、2015年7月)に収録されている。本稿における引用は、これらの教科書収載本文を用いた(ただし、『おにたのぼうし』本文は前者による)。なお、引用における「/」は改行箇所を示し、圏点および下線は引用者が私に付したものである。
- 2) 「くり返しに着目して中心人物の変容をとらえる授業——『もうすぐ雨に』(光村図書三年)」(青木伸生編著・広島県府中市立国府小学校著『「フレームリーディング」でつくる国語の授業』、東洋館出版社、2015年)。
- 3) 「聴耳頭巾」(柳田国男『日本の昔話』、角川学芸出版、1960年、今回は2014年新版による)。
- 4) 中島玲衣奈「教材分析(中学年)おにたのぼうし」(『物語・教材分析と創作』第5集、太陽書房、2016年4月)。
- 5) 柴田遥「教材分析(中学年)走れ」(『物語・教材分析と創作』第4集、太陽書房、2015年4月)。
- 6) 宮崎由里菜「教材分析(中学年)走れ」(『物語・教材分析と創作』第6集、太陽書房、2017年4月)。

---

**“*Mou Sugu Ame ni*”, “*Onita no Boushi*” and “*Hashire*”  
as the educational-materials for Japanese language art  
education**

Koji SHIRASE, Noe MURAZAKI, and Sari UEHARA  
Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,  
Kyushu Women’s University  
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

“*Mou Sugu Ame ni*” (written by Shou Kutsuki), “*Onita no Boushi*” (written by Kimiko Aman), and “*Hashire*” (written by Rie Muranaka), these fairy tales are in the textbooks of the elementary school and we can read them as the educational materials. At Kyushu Women’s University, we are lecturing on the methods of the class-management for the Japanese language art education to our students who aim at the elementary school teachers. Therefore, in this essay, we will analyze “*Mou Sugu Ame ni*”, “*Onita no Boushi*” and “*Hashire*” as the educational materials for Japanese language art education. And then, we introduce the actual examples of the classes.

*Keywords* : Teaching-materials analysis, Actual examples of the classes